村野次郎創刊

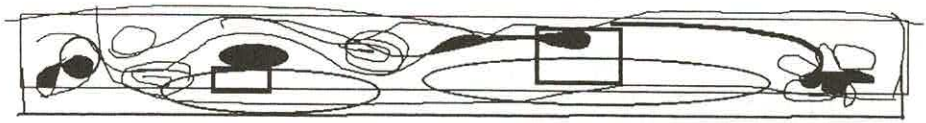
香蘭

2025年(令和7年)10月号

令和7年度　全国大会　特集

第102巻　第10号　通巻1138号

二〇二五年(令和七年)十月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第一〇二巻第十号



香　　蘭

2025年（令和７年）10月号
令和７年度　全国大会　特集
第102巻　第10号　通巻1138号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（122）……金子幸子…表二
近詠十五首　初めての道……手塚春世…2
作　品
一……4
二……22
三……56
推薦香蘭集……62
香　蘭　集……63
作品一　十首選（八月号）桜井　京子選……14
作品二・三　十首選（八月号）高畠　憲子選……16
村野次郎への旅（186）昭和期の「香　蘭」（二十一）……千々和　久幸…18
続・酔風船（22）選歌の余白に――鈴木桂子同人との対話（一）……千々和　久幸…20
一頁公論（53）戦争の記憶……高田　みちゑ…21
令和七年度　全国大会　特集……27
社告　「村野次郎賞」を新設……32
藤本佐知子「刺繍」評（八月号近詠十五首）……丸山　三枝子…66
七首抄（八月号）……関・中井・大里・内海…67
エッセイ・自由研究　死生観の歴史……小城　勝相…68
焦　点（八月号）立ち止まった歌……千々和　久幸…70
作　品　評（八月号）　作品一……朝香　ふさ枝…72
作品二……中村　陽子…74
作品三……渡辺　礼比子…76
香蘭集……満木　好美…78
明宝研究会　第一六六回　七月例会　若手歌人の歌集を読む……松沢　みどり…80
他誌拝見　141……川原　優子…88
歌会及び会合・会員消息・他……90
編集後記・新宿日記……95
令和七年度　全国大会　記念集合写真……表三
表紙絵……山口　蓬春「桔梗」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（122）

一日遊びよく疲れけむ夕飯の
箸（はし）を持ちつつ居眠（いね）むるをさなご

『夕あかり』

金子幸子

この作品は師が大正三年、二十歳の時に平素から尊敬していた白秋創刊の「地上巡礼」に入会し、大正七年二十四歳の時、白秋から「才能ある新歌人の出現」と称讃され、作歌に対する活力、意欲が非常に盛んな頃の大正十五年七月に発表されたもので、歌集『夕あかり』中の小題「夏来る頃」の一首である。

遊び疲れ、お箸を持ったまま居眠むる幼児（長女富美子さんと思われる）を慈しみ、優しい眼差しで見守っておられる師の表情が目に浮かぶ。

私には時折、訳もなく心が落ち着かず苛立つ時がある。そのような時はこの歌を心の中で唱える。情景が目の前に広がり、何事もなかったように穏やかな気持になってくる。歌は人の心を変える力を持っている。

現代では余り考えられない一首かもしれないが、私の心に深く残る歌である。

（『村野次郎全歌集』612頁『夕あかり』）

初めての道

手塚　春世

風音に目覚めし朝をさはさはと雪の寄り来る卒寿のわれに
若きらの声高に話す新造語降り出す雪にポンポン跳べり
雪踏みて来し少女等はケータイにはしやぎて冬の晴天を見ず
足を病む吾につきくる小鴉が共に移動す間隔保ち
絵と見えて文字かもしれぬ看板に冬の光が直線に差す
夏空に変はる窓より聞こえくる若きが使ふ包丁の音
常の日は老いの靴のみの玄関にとりどりの色が夏の陽を受く
振り向きて「夕焼け」と一人言ひたれば一団の少年みな振り返る
泣かされし児が止まるとき泣かせたる児も止まりたり秋蝶の飛ぶ
繰り言の多くを抱けるわがパジャマ泡立ちながら絡まりまはる
惚けし友と折に会ひつつ年を経ぬ独りとの距離はかりながらに

近詠十五首

音もなく積みて朝(あした)の景となる雪の白さは春近き色

春の陽のゆるる海面は不遇なる国へも続くと少年の言ふ

いつよりかあるを忘れし鍵ひとつ奥へまた置き抽斗しを閉づ

九十路(ここのそぢ)初めての道に秋の陽は静かに歩めと野の草ゆらす

ひと言随想

天地に支えられて

居間の天窓から稜線を昇る陽がよく見えて、「わあ、初日の出」と泊まりに来ていた孫が大喜びしたのは三十余年前かー　畑のむこうから札幌発函館行きの列車が、こちらへむかって日に何回か姿を見せ、夜は貨車が何本か通過し、近くの踏切のカンカンと鳴る警報音が闇の中に響くのを聞くのが当たり前の生活だった。転勤族で六十歳近くまでをカタツムリのように生活用具を移動する暮しであった。

それを終え、田舎暮しの安らかさに空を仰ぎ、近くの海へ散歩に行くという老人の暮しとなるも、二、三年後には周りに押されて都会の団地生活になってしまった。朝日は上へ来るまで見えず、夕日は高いアパートが余光を背負っている。孫も小学生二人の親になり、今どきの話しかしない。

私だけの景色はしっかりと頭と胸の中に生きていて、九十路を支えてくれている。

四選者の作品

反知性主義　　平塚　千々和　久幸

さしあたり買うものはなしジョニ黒を一本提げて店を出できつ
趣味で詠む短歌楽しも束縛のなければ風に身を遊ばせて
毒のなき歌は詠まぬと決めたるに夾竹桃が塀越えてくる
日射病が熱中症となりてより地球にわかに沸騰始む
携帯用扇風機なる珍妙な玩具が今年も街を闊歩す
ありようは日和見主義われ　酒飲むか否かで人を分別し来つ
戸塚過ぎ横浜過ぎてそれよりは果てなき夜に吸われ行きたり
反知性主義かは知らね鼻先の肉、蓮根を挟みそこねつ

七五三・三代　　鎌倉　高畠　憲子

祖母われの古着を孫がまとふ日よ着物が一番驚いたらう
着物には物語あり七五三の七歳の帯を三代が締む
六十年前の着物も今なればヴィンテージなどと珍重さるる
お醤油を着物に垂らしたらダメだつた七歳の祝ひのわれの空腹
本物の飢ゑも戦も知らぬまま平和にひたる女三代
九州の醤油は甘くするといふキッコーマンの社長の談話
「キッコーマンは空を飛ぶか」と幼き日問ひし娘も母となりたる
帯解きの晴れ着に番傘持たされて七歳がカメラにする「あかんべえ」

もっと迷え　　我孫子　丸山　三枝子

くりかえし来る片頭痛おさまりて夏の風吹く　もっと迷えと
いつか誰も居なくなるから語ろうよついたち生まれの朔太郎とか
胃と腸の検査入院とて来たる個室にテレビと冷蔵庫ある
栄養剤の点滴スタンド押してゆく手術室まで近くて遠し
内視鏡の映像に見るグロテスク胃も大腸も生きているから
ポリープを五個切除され高齢者なれば退院のばされました
病室の窓のカーテンゆらめけり我の逡巡ほどのゆらめき
夢さめて戦慄したり　ぬばたまの底の知れざるわたくしの闇

唐変木　　東京　桜井　京子

とほるたび青筋揚羽に逢へる道アベリア白く咲きこぼれゐつ
ぐづぐづと迷つてゐるうち時が過ぎもういいと言ふ半夏生はも
長いものに巻かれてをればこともなし屁糞葛はけつこう綺麗
タイサンボク高きところに咲いてをり唐変木とは悪口である
〝きはもの〟と君が言ふ時ほんのりと季節が移るけふは夏至祭
迷つたら前へ進めと言はれてもでこぼこ道なり前も後ろも
なすべきは何も無きゆゑ窓辺よりひととき白い雨を見てゐる
ここまでが海でしたといふモニュメント海は遠くへ去つてしまつて

作品一　十首選

（八月号作品から）

桜井京子　選

・人生は短かけれども一日が長く思えて黄昏のくる

千々和久幸

人の一生は長いか短いか、宇宙の誕生は138億年前に遡り、地球の歴史は46億年、などと思うと、この途方もない数字の前に人生は僅か100年ほどの短さである。とはいえ実感として、人生はとても長いと考える向きもあるのではないか。一日をとってみても何もせず呆として過ごせば長く、何かに夢中になって過ごせばあっという間に時は過ぎる。「人生は長いけれども一日が短く思えて黄昏のくる」などと言っては常套的で歌にならないが。というより、これは作者のパラドックス、これが今の作者にとっての詩なのだ。

年齢を重ねた作者にとって人生は変幻自在、いかようにも思い直して人生を味わい尽くし、美しい黄昏を見ようとしているのだ。

・懸命になることのなく生きてきた乳母日傘の半兵衛のめえ子

丸山三枝子

上句は分かるが、下句の解釈の難しい歌である。ヒントは、この一首前の「子をなさぬ祖母に溺愛されしわれ三文安きままに老いたる」にある。「乳母日傘」は「乳母をつけ日傘をさしかけて、子供を大事に守り育てること、転じて子供が大事に育てられること」である。「半兵衛」は作者の実家の屋号、「めえ子」は「三枝子」の変化らしい。つまり二首とも自身のありようを分析し、やや自虐的に詠んだものと考えると納得がいく。何につけ必死になることもせず、クールに生きて来たというのだが、ナルシシズムの匂う歌。そうは言いつつ実は作者には、もはや乳母日傘気分はないだろう。

・ひらがなは父に習つた　ひらがなの多い葉書を今父が書く

髙島　憲子

幼い頃、手を取って平仮名を教えてくれた父。作者にとっての学びの初めは父であった。聞くところによると作者も作者の父も、かつて教師であったとか。それから長い歳月が過ぎ、父は今、あたかも先祖返りしたように平仮名を多く使うようになった。父の老いをこのような形で見るのは哀切である。畳みかけた「ひらがな」の技巧や、口語表現が効果的で説得力のある歌となっている。

・亡夫の写真持ち歩きつつ失くしきてかくれんぼの鬼にしてしまいたり

伊藤美恵子

亡夫の写真を常に持ち歩いていた作者。夫を深く愛していたのだ。ところが、どうしたはずみか、その大切な写真を紛失したという。

人が死ぬことを「鬼籍に入る」と言い、あの世で閻魔大王の管理する帳簿に鬼(＝死者)の名前が記されることに由来する。ここに名前が載ると、幽明界を異にする夫と、此岸ではもう再会することは叶わない。亡き夫を鬼にしてしまったウイットのある歌だが、この現実の前に作者の深い嘆きが隠されている。

・収穫し必ずうまいと言う為に枝豆播きし日を記しおく

柏原　義清

毎年、同じ時期に播く枝豆。作者は播いた日を書き付けて、年年の記録としてきたのだ。ビールのおつまみに欠かせない枝豆。丹精した枝豆は、「必ずうまい」と決まっている。自ら作物を育て収穫し、その味を知る作者でなければ歌えない確信のひと言が嬉しい。

・嫌はるるを知るかのやうに咲いてゐる空き地のすみにナガミヒナゲシ

鈴木　桂子

春先に橙色の可憐な花を咲かせるナガミヒナゲシ。帰化植物だが、生態系に悪影響を及ぼすとされ、駆除が進んでいる。もとよりナガミヒナゲシに罪はなく、その身の上に同情を寄せる作者。

作者は何か生きづらさを抱えているのだろう。ナガミヒナゲシに自身を重ね、嫌われながらでも生きてゆく他はないと覚悟している。孤独な作者の心をひと時慰めた花も、やがて潰えていっただろう。

・幾年もさら地のままの医院跡に春は物言う木蓮の花

鈴木　順子

北海道在住の作者。北の地に春の訪れは遅く、周囲にさきがけて咲く木蓮は、待ちかねた春を実感させて喜びもひとしおである。

木蓮は、かつて医院があった頃から咲いていたかも知れぬ。医院が無くなって久しく作者も年齢を重ねたが、春、鮮やかに存在感を示す木蓮を見上げ、新たな息吹を感じて立ち尽くす作者である。

・微笑みを返しつづけて日が暮れて今日もさびしい一日でした

松沢みどり

周囲の人々に気を配り、仏頂面をしたりしないのは大人のたしなみである。多少気に入らないことがあっても、笑ってさえいれば波風は立たない。とはいえ、それは結構ストレスがたまることでもある。こんな日のために短歌があり、「今日もさびしい一日でした」と総括すれば、冴えない一日もとりあえず立派な詩歌になる。

短歌は「魂の浄化装置」と述べたのは誰であったか。短歌の効用であり、且つ、この歌を読んだ誰かをきっと励ましてもいる。

・母の日にケーキと花が届きたりメールのみにて声も聞こえず

満木　好美

母の日に子からケーキと花が届き、良好な親子関係が窺える。その上、メールも届いたとすれば、これはもう自慢たらたらの歌か。ただし、メールを送ったのは母親自身とも取れそうだ。作者の本音は、物だけでなく子の声を聞きたかったのだ。現代はネットが普及したお陰で、簡単に物を買って送れるし、電話を使わなくてもメールなどでメッセージを伝えることが出来る。便利にはなったが、コスパ、タイパだけではない、血の通った温もりがほしい、などと言いだせば、もはや時代遅れになりつつある証左かもしれぬ。

・千々和氏と二人で高速艇に乗るきらきら眩しい明け方の夢

渡辺　君子

かつて「香蘭」の全国大会は、各地で多くの出席者を集めて盛大に開催されていた。日程の中には必ず一日は観光が組まれており、作者も若かりし頃は参加して大いに楽しまれたようだ。近年は東京で期間を短縮して開催しているが、聞くところによると、作者は今年の全国大会に申し込みするのを失念していたらしい。

夢に見た高速艇で千々和代表と同行したのは、いつかの全国大会での記憶かも知れない。夢とも現とも分からないが、「香蘭」にとっても作者にとっても良き時代、まさしく青春時代であった。

作品二、三　十首選

（八月号作品から）

高畠憲子　選

〈作品二〉

・手懐けしイソヒヨドリに餌をやる手懐けられしは私の方か

小笹岐美子

イソヒヨドリを詠んで発想がユニークである。村野次郎にも、鳥、虫、小動物の歌が多い。歌やエッセイによれば、特に、鵯がお気に入りだったようだ。鵯は吉鳥。名が似るこのイソヒヨドリも、幸せの青い鳥といわれ吉鳥。かつては名の通り、磯にいる鳥だったが、近年は住宅街にも現れる。美しい羽色をもち、鳴き声もきれいなこの鳥を作者は気に入って、餌をやり手懐けたのだろう。だが、手懐けられたのはどうも自分の方だったのでは、と懐疑している。ウイットと苦みがある。てなづける、という言葉が「懐柔」をイメージさせ、人間世界のことのように思わせてくる。

・スキップにハシブトガラスの入りゆく路地に溢れて咲く花水木

小原　裕光

この一年、歌では快進撃中の作者。昨年の、実に綿密な木俣修研究《明宝研究会》は記憶に新しい。八月号「縄文の土偶」六首にも、大きな歌会で高評価の作品が並ぶ。この一首、見たままの描写に徹しているが、不思議な魅力がある。この鳥が地面を進む様子は、まさに両脚を揃えたスキップ。嬉々として路地に入っていったように見える。路地の先には満開の花水木。対比の妙がある。このカラス、期せずして楽園に踏み込んで行ったかのよう。どこか、ユーモアのある眼がある。また、描写と韻律のマジックだろうか。シンプルな事実だけを詠みながら、非日常の世界へ読者をいざなってくる。

・天国にライン届くか、にＡＩの答は「無理だが心に思え」

加瀬喜美江

ＡＩが歌を詠んだり、歌評もする時代になってきた。心配事を実に巧みに受け止め、回答もする。時に、プロのカウンセラーを凌ぐこともある。一連に〈人間に相談しづらい悩み事をＡＩに聞いてもらう現代〉という一首もあった。現代の様相を写している。掲出の一首、親しかった友への挽歌。頻繁にラインを交わしていたらしく、その喪失感はいかばかりか。いたたまれず、分かりきったことをＡＩに聞いてみたのだ。下句の答え、含蓄があり人間が形無しである。

・香蘭の歌会の声は聞こえたかロビーに坐します湯島天神の神輿

関　哲行

今年の全国大会は、昨年同様、湯島の東京ガーデンパレスにお世話になった。湯島天神の立派なお神輿がロビーに美々しく据えられてあったことが懐かしく目に浮かぶ。坐します、に、お神輿への敬意がこもる。土地のシンボルに香蘭の歌会の声を聞いてもらうことは、大会の無事を祈ることにも通じる。歌意は異なるが全国大会を詠んだ村野次郎の〈ここよりは声とどかねば会場のかなたに高く手をあげにけり〉を思う。過去ながら、この歌の返歌のようだ。

・通学路逸れてすすきを踏みし跡は児らが作りし道草の道

三神　進

近所を通る小学生たちを観察し描写する。賑やかな通学風景が目に浮かぶ。道草の道、という把握がユニークで、ほほえましい。道草とは本来の道を逸れること。だが、そこにも道がある、というところに、子どもを主体にした作者の優しい物の見方がある。〈道草の道の先なる秘密基地を「ないしょ」と小声に児のひとり告ぐ〉も、連作中の一首。掲出歌とともに子どもへ寄せる気持が温かい。

〈作品三〉

・ひわひわと小骨をとりて鮎食めば夫をし思う寒狭川辺に

石川　詔子

鮎は季節のもので、筆者もたまにいただくが、やわらかでみっしりとした小骨に特徴がある。初句のオノマトペが、鮎を食するときの感じを巧みに表現していて感服した。寒狭川、という固有名詞や言葉の響きが、場所のイメージをかき立てる。愛知県の鮎の名所のようである。作者やお連れ合いの故郷か、あるいは夫婦で旅をした思い出の地であるようだ。夫をし思う、の「し」は強め。この夫、故人であれば、さらに一首が深みを増してくる。

・お土産は灘の酒粕香りたる「甲南漬」と昨夜より決む

大里　友江

甲南地方、芦屋川の辺りを旅された歌の一連の掉尾。旅を詠むとき、絵葉書的にならぬよう、日ごろ筆者も気をつけることだが。この一首。その土地の名産品をうまく詠みこみ、作者らしさやその土地に踏み込んだ臨場感を出し、個性がある。灘の酒粕、であるから香り高いそれを思う。昨夜より、というところに力が入っているな、と読者もほほえましい。土地の景も大事だが、このような些事や行動を描写することで、思い出が鮮やかになる。

・町内に鯉幟あげる家のなく欠伸してをり五月の空は

中野美代子

少子化の歯止めがかからない。筆者の近所でも、幼稚園が一つ閉園。お産のための施設も閉じた。鯉幟が揭揚され青空にはためく風景。それは、昭和の昔、子どもの日によく見る景であった。しかし今は、大規模公園や、川に綱を差し渡してのイベントになってしまっている。五月の空は欠伸してをり、という直感でこの一首が輝く。鯉幟があがらない空が退屈している。まさに現代の景である。

・靴の底が抜けたと笑う夫の顔今日も晴れなり赤丸一つ

原　礼子

陽気なご夫君をお持ちの作者。読む方も笑えてくる。今日は晴れ、ではなく、今日も晴れ、であるから、日ごろから明るい方のようだ。奥様をも笑わせながら暮らす。簡単なようで難しい。出来たご亭主と思う。赤丸一つは、妻から夫へか。あるいは、今日も笑えた、と二人で付けてみるのか。いずれにしても向日的なご夫妻のようだ。

・控えめの化粧もそこそこにふる里の同窓会へ出で立つ妻よ

古澤　正道

こちらは夫からの妻讃歌。短歌は悲しみを盛る器、とも言われるが、一方、土地をほめ、相手をほめることで、エネルギーを相互に交換できる力がある。ここでの奥様は、久々に郷里の同窓会へお出かけのようだ。常人なら力が入り、若作りをしたり厚化粧になるところを、控え目のお化粧。それもそこそこに、に人柄が表れている。

村野次郎への旅（186）

昭和期の「香蘭」（二十一）

千々和　久　幸

前号に引き続き「香蘭」第五巻第十一號、昭和二（1927）年十一月號の前月歌壇合評の続きから読んでいくことにする。

あけび　　花田比露思

仙臺にて

みちのくに來てともしくも聞くものか青葉山べのかつこうの聲

かつこうと又も鳴きつもひそかなるなやみいだきて聞きし日偲ばゆ

（庫之介）（一）私は又自分を對稱に考へさせられる。何といふ平明さだ。そして不徹底さだ。更に一歩突き進む鍼のごときものが作者にも無いか。こゝで止まつてしまふのは實に恐しい。私などは勿論こゝまですら入つて居ない。自分でどうにもならない「力の足らなさ」に限りない不安を抱いて懊悩し焦燥し恥じ入る。研磨か本質かと恐れ戦いて思ひ思ふ。歌ふのが恐しい。作者は如何か、敢えて聞く。技巧について―「みちのく」は利かず。作者は單なる感傷に支配せられ「みちのく」と歌ひたくてたまらずに詠み、然うして遂に蛇足たらしめたる感あり。「聞くものか」も悪い。一つ呼吸をひそめていふ所から出發したらよかつたらう。

（二）甘い。徹頭徹尾甘い。（かつこうの聲は鳴きつといふ様に表現さるべきものでない）

（秋石）無難である。（二）危く感傷歌に終らんとしてふみ止つてゐる。（一）（二）共、花田氏のおちつきをしめして少しの山氣もないのは結構であるが、これだけでは未だ満足出來ないと思ふ。

ぬはり　　和田山蘭

崖下の小川のきしにゐる螢わが青蚊帳にきてとまるかも

さくらの葉日にけにこぼれ土にさす日影も今日は夏といひがたし

（翠子）一のお歌、下手です。初歩です。「崖下の小川の岸」は全く觀方が荒いと思ひます。下句も共にさうです。またいへば、螢の宿變へを報告したといふところですが、この螢さんは、間違ひなく小川の岸にゐたものかしら。作者は妥協してゐやしませんか。人間ならば番地まで書くやうに、やはり小川の岸の草の葉かげとか、土の露からとか位の宿所委細をして貰ひたいものです。

（二）のお歌は、少し上手です。事件はもう有り觸れたことです、だがこゝで「夏といひがたし」の句で、思案させる力があります。云ひ方を一寸ひねつたところに、それが案外厭味にきこえない出來榮えになりました。「今は」といふ詞を「いひがたし」で受けました。

（樂寛）（一）上句だけみると螢はまだ小川のあたりにゐさうである。それが下句では「わが青蚊帳に」だ。明滅し乍らとんで來るにはそこにかなりの時の經過がある筈だ、作者のねらひは何處にあるのであらう。蚊帳に螢の來た事にあつたとすれば上句は不用であらう。また飛んで來た經過にありとすれば、もつとよく歌ひやうがあらう。もつと心の燃焼された、生命のある歌をみたいものである。

(二)下句にいさゝか妙味があると思ふがそれにしてもぎこちない。日にけに… あつて、更に今日はとわざわざ斷つたからではあるまいか。

(嘉一)和田山蘭氏のお作とはうけ取れないほど拙い歌だと思ひます。こんな歌で、かれこれいふのは、お互ひにヒマつぶしといふものでせう。御免蒙ります。

白 檮 對島完治

庭暗く立つは何木とありしみぬもぎて喰ひける桃は忘れて

實をとられ久しくなりし桃の木の根方に暗く月見草立ちぬ

(秋石)(一)下句はも少し表現の仕方がある樣に思ふ。單なる説明におちて爲めに上の句の感じをこわしてゐる。(二)も感心されない歌である。甚だ妄言ではあるが、之等の歌では短歌雜誌の雜詠欄にも及ばない。

(樂寛)(一)それは少々ならず困つた歌である。上句だけなら穩當に受けとれるが「もぎて喰ひける桃は忘れて」に至つてはこしらへ事にも程があるといひたくなる。作者は果して何に興味を持ち、何を歌はんとしたのであらう。作品の価値如何よりも作家態度そのものに疑を持つ。

(二)之とても同樣に感ずる。なほ、もぎて喰ひけ、る實をとられ、月見草立ちたちぬ、餘りに言葉が生飲込みではありませんか。

(嘉一)僕がこの歌をいくらつまらないといつたところで、作者として大切なものであつてみれば致し方のないことでせう。僕にはまるきりこの歌の持つ面白味が理解されないんですが、わかる人には、おもしろいかと思ひます。そこに存在の理由もあるといふものです。わからないくせに、勝手なことは云ひたくありません。慎んでひきさがることといたします。

村野次郎の編輯後記を読んでおこう。

十月號の遲刊を今月はいくらか取りかへせたと思ふ。編輯同人決して怠けてゐる譯ではない。小生先月末より身内に不幸あり思ふに任せなかつた。之から新年號をひかへてゐる。大いにやる積リである。今頃から心掛けて置いて歌だけでも同人全部顔を揃へたいものである。

○論文は今月も杉浦女史の手を煩した。芥川氏の短歌の續きは永田龍雄氏來月執筆される筈である。故古泉千樫氏に就いては小生杉浦女史と共に青垣創刊號に執筆した。本誌も同氏のことを載せたく思つてゐる。氏に關しての寄稿を諸君一般より早速お願ひしたいと思ふ。

○同人の歌稿が少ない、も少し諸君に奮發して貰つてもよいやうに思ふ。龜井君は久しぶりで喜しい。ぴりつとした壺中の天地の原稿今月は少ない爲止める。これも奮つて寄稿して貰ひたい。

○會員も夥しく增加して來る。矢張會員は成るべく多數の方が凡ての方面に好都合のやうである。香蘭を眞に信頼してくれる會員を持つことは第一に幸せである。

先生の後記にあるように、今月は気楽な読み物の頁として生まれた「壺中の天地」への寄稿がないのが淋しい。恐らくこの誌面は寄稿待ちだったろうから、編輯者泣かせであったろう。万事が大らかで牧歌的な時代と、タイパ・コスパで生き急いでいる今日とは大違いである。

続・酔風船（22）

千々和　久幸

選歌の余白に
――鈴木桂子同人との対話（一）

鈴木　毎月、選歌をお願いし有り難うございます。表現の細部についての具体的なアドバイスは作歌の上で大いに役立っています。

千々和　それなら嬉しいのですが、毎回が長距離の長電話で表情も見えませんし、お互いの言いたいことが伝わったかどうかも解らずに、恐縮するやら歯痒い思いをするやらです。

鈴木　申し訳もございません。恐縮しておりますのは私の方で、毎月お忙しい先生にお時間を頂きお礼の申し上げようもございません。ただこの頃、作歌をしながら時々思うのですが、先生、短歌って文学なんでしょうか？

千々和　ええっ、いきなり胸倉にドス（匕首）を突きつけられた感じですね（笑）ま、あっさり言えば文学である短歌もあれば、そうでない日記の延長みたいな短歌もあります。ですがわたしは、本来短歌は詩であり、詩は文学だと思っております。

鈴木　はい、もし短歌が文学であるのなら、文学っていったい何でしょう。私は自分の短歌が文学であるのか、個人的な繰り言であるのか、未だにわからないままでおります。それでも毎月、締切りに追われこうして先生に選歌をして頂き、作歌をしております。

千々和　まあわたしだって自分の詠んだ歌が文学であるか非文学であるか、考えて作歌している訳ではございません。それを決めるのは恐らく詩の神様でしょう。

鈴木　ああギリシア神話のミューズですか（笑）わたしは先生の短歌は文学だと信じて読ませて頂いておりますが…。

千々和　畏れ多いことです（笑）。あっさり言ってしまえば、短歌＝詩＝文学とは「生きるとは何か。なぜ生きるか」を「（多くは）悲劇の文脈で表現するもの」という事になりましょうか。

鈴木　ちょっとノートを取りますので、今一度仰ってくださいませ。

千々和　ノートなんか要りませんよ。凡百の「短歌入門」書を読めば、もっと丁寧にもっと上手に書いてある筈ですよ。

鈴木　先生に言われて何だか解ったような気になりますが…。最終的には「生きること」、に繋がってくるんですね。

千々和　ええ、文学の主題は「なぜ生きるか、生きるとはどういうことか」の一点に帰結します。自覚の程度や意識の有り様に深いか浅いかの違いはあっても、この一線を外れて文学はあり得ません。

鈴木　わたしはただ指を折って短歌を作っているだけですが…。

千々和　昔の話ですが、作歌に行き詰まった会員が村野次郎先生に「どうしても歌が出来ません」と泣き言を言ったところ、先生は「キミい、生きているのか！」と窘められたという話があります。

鈴木　なるほど日々を真剣に生きていれば「生きるとはどういうことか」という疑問を抱えている筈だ、という教訓ですね。

千々和　その通りです。話が長くなりましたので今日はこれくらいにして、後は次回ということに致しましょう。

鈴木　はい、長時間お手間を取らせ有り難うございました。

一頁公論（53）

戦争の記憶

高田みちゑ

今年は戦後八十年です。つとにマスコミにも取り上げられている第二次世界大戦の終焉を言います。八月十五日に向けていろいろな語られ方をすることでしょう。

僅か六、七歳の子供だったけれど、私の中の戦争の記憶は消えることはありません。けれど、このようにその事実を語る時があるとも思っていませんでした。

心の中で折々繰り返し反芻して来ながら、それが不確かで曖昧な記憶になっていたとしても、私には大切にすべき貴重な経験でした。「一頁公論」という場を与えて頂いたので稚拙ながら書き残してみようと思います。

私は横浜で生まれ育ちました。一度だけ横浜を離れたことがあります。それは国民学校の一年生の時、戦況がひたすら悪化していた夏のこと。生まれたばかりの赤ん坊を含め四人の子を連れて、母が縁故疎開をしたためです。集団疎開に兄を送り出すに忍びず、また、横浜も危なくなった末の決断だったそうです。

行先は母の郷里、愛知県の一の宮村という農村でした。

しかし、突然にやって来た母と四人の子供達が喜んで受け容れられる筈もなく、母は随分辛かったと後に兄が話してくれました。

次の転居先は豊川市牛久保という処で、母の友達の世話で、ある家の二階を間借りして暮しました。

食糧難を解消する為にクラス総出のイナゴ捕り、お寺の境内での椎の実拾いなどなど。家でも、まだ羽の生えていない鶏の雛を煮たり蚕の蛹を炒めて食べたりしました。かなり苦労して手に入れたのだと思います。

敗戦間近のある日、近くの豊川軍需工場が標的になり徹底的に爆撃されました。あちらこちらの町や軍事施設が連日狙われて破壊されていたのだから、豊川も例外ではなかったのでしょう。そんな時は勿論、老人や子供達は防空壕の中で、ただじっとしているように戒められていました。

どのくらいの時間が経ったのか、静かな気配が戻った頃、遠くの方から、がらがらと人人の行列がこちらに向かってくる音がして来ます。ずれた莫蓙の陰に、泥と血まみれの死者や重傷の怪我人達が、リヤカーや戸板に積まれて運ばれて来るのでした。子供達は道端に立ってその光景を恐いとも可哀想とも思わずに、ただ突っ立ったまま眺めていたのでした。町の民家や集会所などは、緊急の病室として提供させられたそうです。通学路の窓窓から呻き声や悲鳴が聞こえてきて恐いと思いました。道端には焼夷弾の薬莢の山。

あの日々の光景は八十年も経つのに未だに鮮明に甦って来ます。けれど私が幼すぎたのでしょうか、悲しいとか憎いとかおぞましいという感情はなく過ぎていました。

それから八月十五日。生徒らは薩摩芋畑と化した運動場に集められて、終戦を告げられました。意味も解らず、ただ頭（こうべ）を垂れて―。

戦争について多くの事を知るようになった今こそ私は「反戦」を選びます。どのような大義名分も受け容れません。自分の体験を原点としていま少しを生きて行きます。